

投稿規程と執筆細則の大幅な増補改訂について

第28期『文化人類学』編集委員会

綾部真雄（編集主任）

伊藤泰信（編集副主任）

風間計博（書評主任）

箭内匡（編集主任補佐）

第28期編集委員会では、2018年の発足以来、『文化人類学』への投稿に関するルール（寄稿規程、執筆細則）の再検討を行ってきましたが、このたびこの作業が規程の名称変更を含む大幅な増補改訂として結実しました。ここに、2019年度第5回理事会（2019年12月14日）において承認された新規程（「投稿規程」、「投稿に関するよくある質問（FAQ）」、「執筆細則」）を学会員諸氏にお届けするとともに、その背景と意図について説明いたします。

寄稿規程・執筆細則は長く改訂されていなかったため（寄稿規程にはフロッピーディスク、MOディスクなどといった言葉も見出されます）、その改訂は近年の『文化人類学』編集委員会における懸案でした。それゆえ、26期のデザインリニューアル、27期の査読制改革といった流れを引き継ぐ形で、28期がこの作業に取り組むことになりました。当初予想していたのは最低限の改訂を行う作業でしたが、いざ取り掛かってみると、中長期的な視野できちんと取り組む必要があることもすぐに明らかになりました。編集委員全員で現行規程の精査、また国内外の他学会における関連規程との比較を行ったところ、真剣に再検討すべき点が多々見つかったからです。

こうした認識のもと、2018年12月から2019年12月まで丸一年の年月をかけ、編集委員会および理事会で継続的な意見交換を繰り返しながら作成したのが、今回の一連の文書です。「投稿規程」はこれまでの「寄稿規程」に代わるもので、とりわけ27期の査読制改革以降、用語の混乱が生じていたために規程名自体も変更することになりました。「投稿に関するよくある質問（FAQ）」は、学会ホームページにあった旧寄稿規程のFAQを大幅に増補したものですが、内容的には投稿規程と表裏一体の重要なものであるため、ここに併せて掲載することにします。「執筆細則」も大幅に増補されました。旧細則は誌面のミニマムな統一を目指した比較的短い文書でしたが、この新細則では、執筆上の疑問の大部分にもおそらく答えうるような、細部にまで目配りしたものになっています。

なお、今回の改訂を機に、学会ホームページの「学会出版事業：『文化人類学』」のセクションも大幅なリニューアルを行いました。その中の「諸規程」のページには、一連の規程のHTML版——27期による「査読規程」、「査読過程に関するガイドライン」も含めて——を掲載し、学会員が必要な情報に手早く到達できるようにしました。また「執筆ガイド」のページでは、執筆の具体的な手順に沿って現行の諸規程の内容が整理してあり、それによって諸規程の全体を容易に見渡せるようになっていきます。ぜひご参照いただければ幸いです。

1. 「投稿規程」

新たな「投稿規程」の最大の特徴は、投稿区分の全面改訂です。

まず、これまでの「論文」、「研究ノート」、「研究展望」の三ジャンルについては、それらを「原著論文」、「萌芽論文」、「展望論文」と改称するとともに、27期の査読制改革に基づいて、各ジャンルの特徴を改めて定義しました。名称を変更したのは、例えば「研究ノート」という名称だと本学会の外では価値の低いものとして見なされがちなため投稿自体を敬遠してしまう、という若手研究者からの重要な指

摘を踏まえたものです。旧規程の「論文」に関しては、他ジャンルと差異化するため、「原著論文」という名称を用いました。この名称に抵抗を感じる学会員は少なくないと思われませんが、これは自然科学系の雑誌を中心に学術雑誌一般で近年用いられつつあるジャンル名で、遅かれ早かれ広く定着していくと予想されるものです。これら三ジャンルに加えて、「特集序論」を正式に投稿区分名として設定したほか、複数の文献をテーマ的に論じるジャンルとして「書評論文」を新たな投稿区分として設けました（単一の文献についての論評は、従来通り書評としてご投稿いただけます）。

旧規程の「書評」のジャンルについては「レビュー」と改称し、その下位区分として、「書評」と並び、非文字媒体を視野に入れた「映像・展示評」を設けています。また、近年、自主的投稿が少なかった「資料と通信」を「フォーラム」と改称し、下位区分として「著書紹介」、「討論」、「研究報告」、「研究動向」、「教育・社会・研究活動」、「研究史・追悼記事」を設けました（各々の内容については投稿規程をご覧ください）。もちろんこれらも編集委員会による投稿原稿の審査を経て掲載されます。

『文化人類学』はこの新投稿区分によって、学会員の学問的活動を従来よりもはるかに幅広く受け止める雑誌になるはずですが、編集委員会では、学会員の皆さんがこの投稿規程の趣旨を汲み取られて積極的に投稿してくださることを大いに期待しています。

なお、新投稿規程では、学会ホームページにある所定のテンプレートを用いて投稿する形になっています。これによって字数制限に関するトラブルが避けられるとともに、Microsoft Wordの脚注機能を生かしたままで投稿・再投稿できるようになります。

2. 「投稿に関するよくある質問」(FAQ)

この文書は、前述の通り、投稿規程の内容を補完するものです。

近年では、学問の国際化や学際的研究の増加などによって、規程本体だけでは対応しきれない複雑な状況が生じています。この文書では、非学会員との共著についての扱い、二重投稿の扱いをはじめ、学会員が投稿にあたって判断に迷うような多くの事柄について説明してあります。新投稿規程では、任意で略式のカバーレターを投稿原稿とともに提出できることにしており、補足説明を行った方が良い場合には、カバーレターを添えることを投稿者に求めています。

このほかFAQでは、査読過程、投稿区分、特集、英文校閲等について生じうる様々な疑問点についても一定の答えを用意しています。

3. 「執筆細則」

新執筆細則は、全般的なルールを定めた「本則」、文中における引用表示について指針を示した「執筆細則付則1」、論文末の「参考文献」について指針を示した「執筆細則付則2」、の三つの部分から成っており、執筆上生じうる多数の疑問点について明瞭な指針を示しています。この執筆細則が依拠している理念は以下の二つです。

第一の理念は、表記の経済性です。学会誌は学会費による出版物ですから、誌面は可能な限り有効活用しなければなりません。学術雑誌の様々なコンベンションもそのために作られたものです。それゆえ「執筆細則付則1」では、文中での引用表示について、効率的な記述方法を提示しています。また、「執筆細則付則2」では、論文末の「参考文献」における著者名の後の改行を廃しました。従来のルールでは改行によりスペースが多く取られるため（各文献につき3～5行が必要）、この変更に踏み切った次第です。ほかにも、不要な空白は詰め、定型句は短めにする等、経済性を重視したルールを採用しました。

第二の理念は、柔軟性です。執筆細則によって誌面の統一感を確保することは学術雑誌としての信頼度を高めるうえで必須のことですが、同時に、とりわけ文化人類学のような分野では、議論の対象となる現実の多様性、研究スタイルの多様性も考慮しなければなりません。新執筆細則は、一方では細部まで指針を示すものですが、もう一方では、学問上の理由からルールの遵守が困難な場合にはカバーレ

ターで説明し、学術雑誌としての統一感を失わない範囲で柔軟に対応するという方針を採っています。

なお、新投稿規程・新執筆細則は現時点ですでに有効であり、『文化人類学』85巻1号（2020年6月末日刊行）から、これに合わせた形での刊行をスタートする予定です。現在査読中の原稿等、移行期の原稿については、投稿区分に関しては原則として新投稿区分に読み替えて掲載し、また執筆細則については、可能な範囲で著者に対応していただく（ただし「参照文献」だけは必ず新形式に合わせる）ことにしました。つきましては、投稿者の方々にはぜひ柔軟なご対応を、読者の方々には、移行期の誌面上に生じうる若干の不統一について、それぞれご理解をお願いいたします。なお、運用の過程で問題点が発見されることも予想されますが、これについては、学会員からのフィードバックを参考に、次期以降の編集委員会で適宜改訂していただけると考えております。

26期のデザインリニューアル、27期の査読制改革は、とかくトップダウン的で権威主義的になりがちな学会誌の傾向性に抗し、学会誌としての公益性を確保しつつ、『文化人類学』をより水平的で参加型の学会誌にしようとするものでした。今回の投稿規程・執筆細則もまたこの精神を継承し、それをさらに発展させようとするものです。今日、文化人類学分野の研究者には、従来よりもはるかに多様な学問的・社会的ポジションの中での発信が求められるようになっていきます。そうしたなか、学会員共通のプラットフォームとしての『文化人類学』が持つ意義は、ますます大きなものになると考えます。学会員諸氏が各々の最良の研究成果を『文化人類学』に自発的に持ち寄ることは、日本の文化人類学をさらに力強いものとし、その未来を築いていくことにつながるはずです。

皆さまの積極的な投稿をお待ちしています。